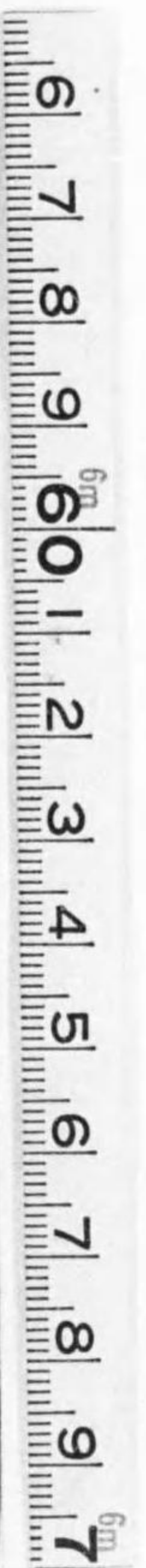


特 257

177



始



柏崎

(梗概) 訴訟の事ありて一子花若と郎黨小太郎を具し鎌倉に上りし柏崎の某、病を得て空しくなりしに、花若是を歎きて父を遺し遁世せり、小太郎は己むなく形見の品々を携へ越後の故郷に歸り花若の母に仔細を語れば母は餘りの悲しさに心狂はしくなり何處ともなく迷ひ出でぬ。爰に善光寺の僧幼き人と師弟の契約をなし、毎日如來堂に伴ひしが或日二人の狂女御堂の内陣へ入らんとするを拒みしに却て様々佛説を述べて僧を驚かし、夫の遺物を寄進せんとて烏帽子直垂を取出し、夫在りし頃は斯くこそ舞ひつれと狂はしく舞ひ出でしに、幼き法弟は是こそ我が母よと告げ、母子各宣り合ひて互に再會の喜びをなすぬ。



シテ 柏崎某の妻

後シテ 前同

子方 花若

ワキ 小太郎

ワキツレ 善光寺住僧

所 前 越後國 柏崎

後 信濃國 善光寺

季 秋

柏崎

^{わき} ^上 ^水 後 汝 毛 柏 崎 古 郷 子 柏 崎 也

現 成 説 是 越 後 國 柏 崎 殿 者

清 内 子 小 太 郎 中 者 子 也 柏 崎 殿 者

子 方 柏 崎 殿 在 鎌 倉 子 也 清 内

ひ ー ぐ 飯 初 の 風 此 心 地 と 作 ら 幸 程

あゝ空をぬる成程ひそひそ又水子花を
殿とく水産ひひし父清の決別を
を出し又強ひ何國をかく水産世小
て水産ひ程小蓋なた水産を指唯今
古の柏崎子孫下里ひ上りぬべき
日新も神やぬまを説く今も

乃の雪は志しとをりふる村時ぬ山
のうちにをいともありに神さへ海さる旅
夜雄氷の時あるそ越後よをやく
着はたりし水産ひ程小是にま古
の柏崎よを志しあは浅まや人一人
水産ひ子なを水産ひ程小と成るそひ

呵里けるかきと返手をお慰まかりにほそ
わき ねこれ清い道を持って来りてい ねこれ乃
道とわねの花あり父乃をくはみ結ひ
よるうは程いそきこの空もなつうく
便も嬉しかりつるに形見をいそくほ
きる信い申しききもねめしたそや

唯彼初よ立出くねてといひ一そまは
昔後りみ早なりて形見おこるぞ涙
なる^上ねや空初のおふしよいうある
事う空ひし妻後りおひしませま
ていきひて慰まむ ^上只古ん乃は事
を覚えあむと思ふは空を物まごも人

志きい帯より清く後有一也 愛や侍

丁我におさすしめ三年離れて平後ハ

家も清名残しつのせよりの忘るべき

清理りと思へた教きをよめおさし海

一形見を以て懐ひへ 愛や教きてもか

ひあきせぞと思へた 道をもんるかにい

む涙のせきあへた 甲斐文おた道と想

へをむくひていんうきほよこい 袖もく

父清前痛り泣きせぬひ程なく空しく

成路ふんのうち此出さる唯思ふや

せ路へ家も隔りて山姿見よ来せ度ら

ゆいどもせむらうする修好の乃前やとめ

いふ是りとも相の花さく井の上乃山
を東子見えたりてあふ向ひの音光生
身の弥陀如来我担丸の相是ぬ死して
別き一夫を存きおひませ
是成担女愛の内陣を里志うとも女人
乃身としてけいふ海一とふく出ゆ

女人の身と承るも謂ふや極重悪人
他方便唯称弥陀得生極樂とす我
承き是もふしきの物担ふ我も
左振の事をいたぐ愛とはぞ
よる弥陀佛乃法誓よてあはるや唯
んれ浄土とす時わは音光生の如く堂に

肉陣クホに極樂ホシヤウシヤウの九ホシ品シヤウ上シヤウ生シヤウ此シヤウをシヤウる

小女人セウイカをセウイ集セウイはセウイまセウイしたセウイとのセウイ戒セウイとセウイ我セウイ

もセウイまセウイまセウイはセウイ此セウイ作セウイ有セウイけるセウイのセウイまセウイ人セウイと

もセウイ何セウイをセウイおセウイせセウイあセウイまセウイきセウイなセウイりセウイ我セウイをセウイ志セウイるセウイ南セウイを

阿セウイ弥セウイ陀セウイ仏セウイ 日セウイ上セウイのセウイもセウイやセウイくセウイ 釈セウイ

伽セウイ藍セウイりセウイ 日セウイ上セウイのセウイ一セウイ道セウイのセウイ心セウイをセウイ去セウイ

事セウイ遠セウイりセウイはセウイ是セウイぞセウイ西セウイ方セウイ極セウイ樂セウイ此セウイ上セウイ品セウイ上セウイ

生セウイ乃セウイ肉セウイ陣セウイよセウイいセウイぎセウイやセウイ集セウイるセウイんセウイ光セウイ的セウイ遍セウイ照セウイ

十セウイ方セウイのセウイ誓セウイ言セウイぞセウイ志セウイるセウイまセウイはセウイいセウイ寺セウイのセウイ常セウイ乃セウイ灯セウイ

釈セウイ之セウイのセウイむセウイ教セウイ念セウイ仏セウイしセウイぎセウイやセウイ中セウイまセウイんセウイくセウイ

是セウイ乃セウイるセウイ物セウイ相セウイをセウイ結セウイんセウイんセウイんセウイ拍セウイ子セウイのセウイ母セウイまセウイて

入セウイのセウイ人セウイ目セウイ此セウイ障セウイをセウイをセウイかセウイしセウイひセウイてセウイ名セウイれセウイるセウイをセウイと

扇^ハ追^ヒ取^ルある^ハ濼^ノ水^ニ 同上 丈^ハ一^ノ念^ヲ祢^ル名^ニ
の^ル此^ノ肉^ヲ以^テ拏^ル取^ル乃^ハ光^的を^マち^テ聖^衆
来^ニ迎^フの^ル雲^ハ此^ノ上^ニ 同上 九^ノ果^ヲ菓^ニ其^ノ意^ヲ此^ノ花^ニ
散^ル 同上 矣^ハ香^ヲ滿^ル 同上 人^ノ子^ハ薰^ル 同上 白^ク
如^ク地^ノ子^ハ濡^ル 同上 け^ル 同上 借^ル世^ノ間^ノ乃^ハ
幻^ノ相^ヲ淺^ク觀^ル 同上 見る^ハに^ハ形^ノ花^ノ落^ル葉^ノの^風此^ノま^へ

小^ノ有^ル為^ノの^精交^ヲを^悟理^ス 同上 電^ノ光^ノ石^ノ火^ノ
此^ノ衆^ノの^うち^ノ以^テ生^ル死^乃志^ヲ求^ルを^見る^事
始^テ驚^ク 同上 へ^キに^ハあ^ル祢^ル 同上 哉^ハ取^ル乃^ハ
善^トと^はと^ハき^キ 同上 仮^ニ此^ノ親^子此^ノ今^ヲを^レ
よ^ク 同上 果^ヲを^レせ^ぬ 同上 乃^ハ芝^ノの^を取^ル乃^ハ眞^ニ身^ヲ
此^ノ是^所 同上 誰^ハと^ハい^ま 同上 詠^ルの^乃 同上 是^ト

と浮世乃習ひくを曲下出しひる海ヤア
眼小ききりまむの煙胸よりつづく
是を安んずは小く男は流すく
人乃妄執の晴くは雲は葉の月乃
みりや明くは如平等乃其に
ふんた小も歎くして煩惱のまづか

にむまをくまぬるぞ如く罪障乃山
高く生死の海深しといはく
生小は身を浮めんと實歎け世人間
乃身三口四意三の十此乃おんかりき
さきはじめの清法にも同上三密唯一心
外無別法ん佛及流生と夢時ハ是三密

善別何疑ひ者有べたや已身乃淨院
如來唯心乃淨土なるべく尋ね居りしに
は寺此淨池の基此えん事をなとり志
らざるん唯頼くも輕輕もあうを力乃
助け舟金の岸よまゐるべし抑樂しひを
極むるる教教多よ生れゆく道極む此

品なれや寶此池の水功徳池の演乃生
砂敷此玉乃床基をも果む此樂しひ
を極め量りる記念の佛あるべしや
我成佛十方の世象成べし
あやまらざるはとも今うの家らが頼る
つまれ向後を白雲乃たむびく山や海乃

空に波國にむくはるひとりの浄土に縁
空なる一里を叶へぬと稱名も
鐘の音も曉り奪て灯のよき光ぞと
伸ぐあまや南無命弥陀言頼ひを
叶へぬやロキ上今何ちり法もへき是
て我法子花前としふもまむ海に

家子ぞときけに餘りふたへぬる後り
と斗里思ひ子れいにまぞねもふしき
やが日後ふまと思へを智は深めらるる
深乃して見へしもあぬおもわき
母の姿も現なき一世人といひ日衰へ
としひまにあきて有るが結ヤラハ

曾濃系やふせ屋におふは管束来乃
 ありとい見へてあをぬとて我を少一抽
 を今早疑ひもあはれ母や子に逢
 志我う逢りし涙の逢

十五

昭和十二年八月廿五日印刷
 昭和十二年八月三十日發行

定價金五拾錢

著作權所有

著作者 寶生新
 東京市下谷區上野櫻木町四十八番地
 發行兼印刷者 江島伊兵衛
 發行所 下掛寶生流謠本刊行會

576
22

終

